
神様になれ!!

バスカビル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様になれ！！

【Zマーク】

「Z555」

【作者名】

バスカビル

【あらすじ】

日常からいっぺんしてハラハラドキドキの戦闘ライフ。

これは次代の神に任命されてしまった少年が様々な世界を旅していくおはなしです。

今のところネギまのみ。

チートな描写がかなりあります。

まあでも神だからしかたないよね

神になる

いつもと変わらない朝、
いつもと変わらない学校、
そんな日々がいつまでも続していくと思っていた。

学校の帰り道、工事中のビルの横を通った。
いつたいどれだけ高いビルになるんだろうか、そうおもつて見上げ
ているとガコツとおどがした。

最後にみたのは腹のところで二つにわかれた自分の体だった。

「おーい、おーい」声が聞こえる。

（ん？ なんだ…？）

「おーい！ おきるー！」耳元で大きな声が聞こえた。

「うわ！ なんだ？」いつたい何事だろう。

「ふー、やつと起きたか。」えつ、なんですかこの状況。

周りには草花が咲き乱れ、鳥がさえずり、動物達が愛を語らつてい
る。そして目の前には超絶美形……。

「えーと、じなたでしょつか？」

「神だ…！」……は？

「それでな、君は死んでしまったのだが、なんと、君は10000
0000000000人目の死者なのだ。人がきりのいいかずで死
んだ場合、その人間は神になるときまつているのだ。おめでとう今
日から君は神様だ。」な、なんだってーー。

「え…、は…、な…、」頭がぐるぐるする。
そんな僕にお構いなしに自称神は話続ける。

「いやー君は運がいい。君は神は神でもそんじょそこらの神ではな
い。最高神である私は今をもって隠居する。君が今日から最高神だ
！…」

「& amp; @ * / (#\$!-!-!」頭が限界をこえた。

……しばしばいたつて……

「はあー、いろいろひつひみたいところはあります、いつたいぼくはなにをすればいいのですか?」

「ふむ、まず神に必要な心を養つために様々な世界をまわつてもらう。」

「世界?」

「うむ」神がうなづく。「世界は無数にある、その世界をまわり様々な人とふれあうことで神としての心を養つてもらひ。」

「なるほど」いつてこることはすじが通つているな。

「それではまずネギまくの世界についてもらひ。」

「ちよつとまで、なぜにネギま?」

「決まつているだろ?、おもしろいからだ。」お、面白いからつて

……。

「それではいつてこい!」神の手がピカピカ光だした。「えつ、

ちよつとま

「GO!-!-

「うわ————」視界が真っ白になつた。

神になる（後書き）

感想お願いします

どんだけ

「……うーん」だんだん視界がはつきりしてくる。

「これは『あれ』をみあわしていふと突然声がした

アホー
元祖アホー

“**સાધુભૂતિ**”

だから元禄たゞからそこ詰問をしてやる。そこは力萬中のネギまのせかいだ。まあ、どこに行くかとか何をするかとかは君で決めてくれ。それじゃあなくブツツ、ツーツー……

「ほんにするか……」 そろはつても食料を調達しなくてはならない。

1	戦う	いや、むりだろ
2	道具	いや、もつてないし
3	入れ替える	いや、仲間いな
4	逃げる	これだ――

逃げるを選択した
逃げられなかつた。

えーい！ かハかだー！！

やぶれかぶれで知つてゐる呪文をとなえてみる。「ブ、プラクティビギナル？ アールデスカット！」

「ナラケテビギナル? アールテスカット! (火よ灯れ)」

結果、竜の丸焼きの出来上がりです。

あは……（汗）

「や、やばくないか」

プラクティビギナル？アールデスカットは杖の先にライターの炎ぐら
いの火を灯す魔法、なのに竜を焼くほどの威力、……。

「まあ、『はんにするか…』
（けつ）いつ美味でした。）

どんだけー（後書き）

ちょっとチートすぎましたかね……（汗）
まあ、神なんで許してください
感想まつてます。

神への一歩？

ふー、お腹がふくれたところで、これからどうするか考えなければならぬ。

やはり、ナギやラカン達にもあつておきたい。

そのためにはまず近くの町にいつて情報を集めなければ。

「さあ、いくか！」

……そうはいっても町の方角がわからない。

こうなつたらと、竜の角を持つて上になげてみた、角の先が示した方向へ進もうとかんがえたからだ。

「えい

ヒュゴオ――――――

角は一瞬にしてみえなくなつてしまつた。

「……テキトウに歩くか……」

自分の力にあざらきつつ歩いていると遠くに町が見えた。

「ラツキー！ さあ、町へレッツゴー！――

町へ急ぎ足で歩いていった。

「……だれもいないな――――――

町には活気どころか人一人いなかつた。

気配はするから家のなかにはいるようだが出てくる様子はない。と、そこで近くの家から白髪のおばあさんがとびだしてきた。

「おまえさん、旅人かい？ 悪いことはいわない、はやくかくれなさい。

「どうかしたんですか？ 人も外にいませんし。」

「最近このちかくに凶暴な竜があらわれたのじや。はやく隠れないと食われてしまうぞ。」

（えつ、竜つてもしかして……）

「あの、その竜つてこの角のやつですか？」 上空からふつてきた角をキャッチしてたずねる。

「や、そうじや。その角はまぎれもなくあの龍のもの……こつたい
じつして……？」

「あ、丸焼きにしちゃいました」

「……はつ……？」

おばあさんは驚愕の表情から角を見てそれが本当であるとなつとく
したようだ。

「み、皆のもの……あの龍が死んだぞ…………」

おばあさんはとてもおもえない大音量でさけんだ。

しばらくするとあちこちのいえのどびらがあきはじめた。

住人達は最初は半信半疑だったが、僕がてにした角をみると目をみ
ひらき、すぐに歓声をあげながら僕めがけておしよせてきた。

「救世主様だー」「勇者さまだー」「神さまだー」

（まあ実際に神だけどね……）

異世界について最初の夜は住人達によるお祝いで過ぎていった。

原作キャラ登場！！

昨日の夜は竜の肉を使った豪勢な料理が振る舞われ、飲めや歌えやのドンチャン騒ぎだつた。

最後のほうになるとみな明日からの平和な暮らしに心をおどらせた。「もう作物をあらわれるこどもない」「安心して暮らせる」「あー、ありがたやありがたや」「勇者様万歳！！」

……いつの間にか勇者にされてしまつていた……。

住人からお礼にと竜の角で作つた杖をわたされた。

上位種の竜だつたようなで魔法媒体として最適らしい。

「ありがとうござります。ご馳走までしてだいたのに」

「なーに言つているんだい。あんたが来てくれなかつたらいまでも竜に怯えてなけりやならなかつたんだ。礼をいわなけりやならないのはこつちのほうだよ」

住人達にいまのせかいの様子を聞き、旅立つことにした。

「また、きなよいつでも歓迎するからねー！」

住人達にみおくれられ、旅を再開した。

まずはやはり魔法を使えるようにならなくてはならない。

「んー、そのためには誰かの弟子になるのがいいかな。」

どこにいけばいいのかわかるわけもなく、恒例（四回目）の儀式をする。

「よつー」「ヒュ」「オー

杖が大空にすいこまれていつた。

……

（ちょっと強く投げすぎたかな……）

反省しているとうしろから声がした。

「おー、そこの小僧。さつさと食い物をだしな。おとなしくしてい

ればなにもしはしない。」

「ケケケ、ティコウスルト、イノチノホショウハナイゼ」

そこには金色の髪をした吸血鬼らしきおんなとカタカタうごく殺人
にんぎょうがいた。

原作キャラ登場ーー（後書き）

誰だかわかるでしょうか？
評価をポチッとくださいな

弟子入り！！

「あー、ねばねばー、

「ふつふつふ、 そうさ私は最強の吸血鬼エヴァンジエ 「キティちゃん！」

「アアア、カワライラシイ！」

ケケケガワイテシイセシシシント

（こんなに早くギテイせやん（エハラ・ンショ））はあるなんて云ツキー。これも竜の角の効果かな。あつせうこえはあの杖はどこに

「ふつふつふ、その名をしられたからには死んでもらブユ!!」

杖がエヴァンジェリンの頭にめりこんだ。

100

卷之三

「……な?

「なにって膝枕だけど?」

？」のわたしが無様にたおれるとは……」「

あーそれは、かくかくしかじかでー

「な、なにーー！ただの偶然だと！そんなことではわたしのプライドがグチャグチャだ！えーいわたしとしようぶしろーー！」

「え、じゃあ負けた西川は勝った西川のまへじをなんでもいいわ
くじとじよひ

「ふつ、いいだろつ」

こうして、エヴァとの勝負がきまつた。

勝負開始！

「まあ、坊やど！」からでもかかって来るがいい！」日向の透り抜
きの表情です。対して……
(や、やばい勢いであんなことこつけたけど僕呪文あれ(ア
ラテスカット)しかしないし……)
「そっちがこないならこいつちからこぐやーー。」

「ケケケ、シニヤガレ」 チヤチヤゼロも殺る仮まんまだーーー！
それにくらべて……

「.....」
.....

「ふつ、くらうかい」おと田ヴァがえいしょうをはじめた!!
「リク? ラク? ラ? ラック? ライラック
セプテンテキム? スピリトウス? グラキアーレス? コエウンテース
? イニミクム? コンキダント
(氷の精靈17頭、集い来たりて敵を切り裂け)
サギタマギカ? セリエス? グラキアーリス
(魔法の射手、連弾? 氷の17柱)!!」

（絶体絶命だ——）

「あーあー、聞こえるかー、こちら元神く
きこえますとも、どうにかしてくださいーー
ふつ、いいだろう。ではこうせけべー！」

気合い防衛――――

「えつ、え——! —! —!」

卷之三十一

(し、しかたない)

「気合い防御ーーーーー！」

ボキエウー

煙りがはれていく、

「な、無傷だとーー！」

かすりをす——つついでしない。

(たすかた)

「うつ、うららか」

のぞみをいうがいい

「えつ、それじゃ弟子にしてくだね。」

「いいだろう、ただし私の授業は厳しいからな、かくじしる。」

は
はい!!
(あしたからかんばるぞ!)

カレショーンは元神でおぼくらしていきます。

「ケケケ、オレノデバンガゼンゼンネージヤネーカ、ツギハアバレ
テヤルゼ」

修行開始！！

エヴァのもつ別荘のなかで修行第一日目が始まった。

「よし、まず貴様はどの程度魔法が使えるのかしる必要がある。貴様の使える最強の呪文をとなえてみろ！」

（えつ、呪文つてあれしかしらないんだけどな……）

「……わかりました」

杖をかまえて呪文をとなえる。

「プラクテビギナル？アールデスカット！……」

ドガブアブオーネン！……！……！

近くにあつた岩がけしとんだ。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「またいきなり元神の声があたまに響く。

＞神だからさ ｖ

「……なんででしょうね……」

＞おいおい無視すんな ｖ

「多分魔力が凄まじいからだと……」

「そんな馬鹿な、貴様からそれほどの魔力はかんじられんぞ」

＞ふつ、ふつそれはね ｖ

「こりずに元神がかたつていい。」

「あまりにも魔力がおおすぎてきづけないのさ。生き物はあまりにも強大な力を感じるとそれを感じるのをやめてしまつのか。まあかんたんにいえば格がちがう！…」

「なぞですねー」

「お願い、無視しないで…」（泣き）

「ま、まあいいそれにしても最強呪文がこれとこいつとは魔法について学んだことはないのか？」

「はい」

普通は魔法なんて存在しないしね

「ケケケ、ハンソクテキダナ」

「なら基礎からやつていこう。あまえと私が力を合わせればかいせいふくだつてできそうだ。」

「おねがいします！…」

「よし、まずは魔力のコントロールだ。そのバカみたいにでかい炎をろうそくの火の多きさまで縮めるのだ」

「はい！…」

「コントロール、コントロール…」

「プラクテ…」

「ドガアーネン

「プラクテ…」

「ズガアーネン

エヴァの別荘をボロボロにしつつも修行一日はすがめていった。

「オレノソンザイカンガ…」

「わたしの扱いが…」

かなりきにしている一人（？）だった。

…

…

…

エヴァの別荘をボロボロにしつつも修行一日はすがめていた。

修行2日目---（前書き）

エバア ハヴァに修正しました。
ご指摘ありがとうございます。

修行2日目ーー！

まる一日たつて、どうにか火を口ウソクの大きさまで縮めることができるようにになった。

「プラクテ？ ビギ？ ナル？ アールデスカットーー！」

ポツ、火が杖先に灯る。

「よし、力のコントロールはここりでいいだろ。つぎはつかえる魔法の数をふやしていくことだ。わたしのあとにつづいてとなえてみる」

そういうて、エヴァは鉛筆を数本ゆかにたてておいた。

「ゆくぞ。プラクテ？ ビギ？ ナル？ セーインウエルタント（倒れる）！」

カラランッ カランッ

鉛筆がよこに倒れる

「別にこれもやくにたつものではないが魔法の基礎を学ぶにはよい呪文だ。さあ、やってみるがいい」

「はい、マスター」

魔力をコントロールして呪文を唱える
ちなみにきのうの夜からエヴァのことをマスターとよぶようになっている。

「プラクテ？ ビギ？ ナル？ セー？ インウエルタントーー！」

カラランッ

今回は無事に成功した。

「ふむ、どうやら魔力のコントロールは完璧だな。これからは攻撃魔法や防御魔法など実際にやくにたつものをおしえてゆく。より覚悟をもつてのぞめ」

「はい、マスターーー！」

「つむ、ところでもし魔力のコントロールなしでとなえたらどうなるんだ？」

「ああ?、じゃあやつてみます。プラクテ?ビギ?ナル?セー?イ
ンウエルタント!…」

ズ、ズガガガガガーー

近くの山がよこだおしになつた……

「…………」

「…………」

「…………すまん…………」

「…………いえ…………」

どうやら魔法のロントロールはどんなときでもしてこないときけん
らしへ。

しかし、魔法習得の速さはそんなに遅くはないだらう。

「ふつふ、おそくないどころかその世界のだれよりもはやく魔法を
習得できるだー。なんたつて神だし!…

もはやかげの存在になりはてた元神がさわいでこる。

「それよりもいまのうちから始動キーをどうするか決めたほうがい
いぞ。自分にもっともしつくづくの靈のある単語ならなんでもい
いからなー

(始動キーか……)

あらたな課題をのこしつつ修行2日目が過ぎた。

修行2日目ーー（後書き）

主人公の始動キー、いいものをおもいつかれた方は感想欄にのせて
くれないでどうか？おねがいします。

「今日から実際に戦闘時や生きていく上で役にたつものをおしえていく。もう魔力のコントロールは完璧だから1日一個といわすどん呪文を習得してもらうぞ。それとそれを使った戦闘訓練もはじめていく。」

「ケケケ、ヒサビサノデバンダ。ヤツテ（殺つて）ヤルヤツテヤル

……

「は、はい」

（チャチャゼロが殺氣だつてる。なんでも）
なかなかでばんのなかつたチャチャゼロはめぢやくぢややるき（殺るき）まんまんだ。

「防御の方法は基礎中の基礎。魔法使いはたいてい魔法障壁を常人展開している。軽い攻撃なら防ぐこともできるし、威力を落とすこともできるからな。さあつかつてみる。」「すうーといきをすいこみ唱えだす。

「プラクテ？ ビギ？ ナル

エレメンタ？ アエリアーリア？ ウエンティイ？ スピランテース？ キト
ー？ アデウンテース？ アブイーミーキス？ メイス？ メー？ テーフエ
ンダント（大気の精よ 息づく風よ 疾く来りて 我が敵より 我
を守れ） リーメス？ アエリアーリス（風陣結界）！—
ブワツ

風が体のまわりを膜のようおおつしていく。

「これが魔法障壁風ｖｅｒだ。常にこれを発動しながら魔法を使えるようにしろ。魔法障壁を展開したまま次の呪文だ、攻撃魔法でもつともよくつかわれる「魔法の射手」これができなければ話にならんからな。で、どの属性を極めたいのだ？」

「やはり、マスターと同じ氷属性がいいです。」

「そ、そつか／＼／＼／＼

（なんだか恥ずかしい……）

意外と純なエヴァだつた。

「サギタマギカ？セリエス？グラキアーリス（魔法の射手）連弾？氷の17矢）！！」

ズガガガガガガ！－！

「よし、次！」

「サギタマギカ?」

۱۰۰

ふつわまつまつ

「一九三四年九月三十日、松井義士の死後、松井の死因は、

の腰に手を置く。腰に手を置く。腰に手を置く。腰に手を置く。腰に手を置く。

いが勝つておかねばもつ一度と勝つ機会は」なくなるかもこれんな。

1

「よしー戦闘訓練をはじめるぞー！」

ケケケ、ヤルゾーヤツテヤルゾー！！！！

十一

（なんでエヴァまで殺氣だつているんだ…）

不穏な空気がうすまくなか、戦闘訓練（殺し合い）が幕を開いた。

修行3回目（後書き）

あーー、始動キーが思いつかない。

だれか感想欄に書き込んでくれませんかねー？

ダメですか……

ならアンパン？ ショクパン？ カレーパンとかにしちゃいますよーーー！

いいんですか！

……

……

……調子このつて、ゴメンナサイ

チートがやぶれるとか……（前書き）

今回チートキャラが負けますが決して弱いわけではありません。どんな強大な魔力をもつても呪文をとなえなかつたら意味ないでしょ？

チートがやぶれるとき……

「それではまず最初に確認しておぐぞ。私はチャチャゼロを使うかわりに魔法はお前におしえたものしかつかないそれにお前は私に触るだけで勝ちとする。それと魔力や気もコントロールして使えるいいな？」

「はい！」

（神からもらつたチートな才能、それにマスターも教えてくれた魔法しか使わない。これは勝てる……）

「開始だ！！」

エヴァと同時に後ろに一步下がる。

「リク？ラク？ラ？ラック？ライラック！…！」

「プラクテ？ビギ？ナル！…！」

同時に呪文を唱え始める。

「セプテンティキム？スピリトウス？グラキアーレス？コエウンテース？イー」

「ボン！」

チャチャゼロが剣を振るい呪文が中断される。

「ケケケ、ザンネンダッタナー」

「くそ！…！」

ちょうどエヴァが詠唱をおえたようだ。

「サギタマギ力？セリエス？オブスクーリー（闇の29矢）！…！」

「くっ！」

エヴァのサギタマギ力を横に倒れこみ回避する。

「どうした、もう終わりか！」

「まだまだー！！」

チャチャゼロの攻撃をかわしつつ呪文詠唱を完成させようとするが

チャチャゼロの攻撃をかわすだけで精一杯だ。

（このままじやいつまでたつても勝てない。まずチャチャゼロを倒

す」と「集中しよう」)

氣で身体能力を上げ一気にチャチャゼロにけりをはなつ。

ス
力

「ケケケ、アメーゼ
チャチャゼロは簡単にナリをよけないと剣をまっすぐ振り下ろしき
た。

（JN）ああか！！

魔法障壁全力展開！！

「サギタマギカ？セリエス？グラキアーリス（氷の300矢）！…」風の魔法障壁で頭が落ちるのはさけられたが髪が一部切れてしまつた。そうこうしているうちにエヴァは詠唱をおえてしまつたようだ。

二二九

「ケケケ、クタバレー！！！」

さらに攻撃もしてきた。

魔法隔壁全力展開！！

威力を出す」とおどき出す

「ハサフ———。」

ボロボロの布のような物体がそこに出現した。

「アーヴィングの死」

高笑いがその場にいつまでも響いた。

チートがやぶれるとき……（後書き）

最近少しづつ感想くれる人が増えてきました。

……まあ、ほとんどが書き間違いに関するものですが……。

間違いばかりですみません。

でも始動キーを教えてくれた人もいてすゞくつれしかつたです。
感想（始動キーも）まつてます。

パートナー

「うへ、うへ、ぐす。」

「おい泣くなよ……。相手が悪かつたんだよ。それに負けるのも良い経験だぞ。」

元神が慰めてくるけどそんなことでは気持ちは晴れない。

「……僕すっごく強い力をもらつたのに全然はがたなかつた……」

「……ここまで行けると思ったのにな……。ぐす」

「おいおい、男だろ。そんなにメソメソするな。つぎに勝てばいいじゃないか。」

「……ムリだよ。いくら魔法を覚えたって唱えるヒマがないんじや……。」

「それならおまえもパートナーをミシケレいいだらうが」

「……パートナー？」

パクティオの相手のことだらうか？

「そうだ、お前にも従者がいればいいんだよ。」

確かにそれは一理ある。

「でもどうやって……」

「恒例のあれをやればいいだろが……ウジウジしてなことわざをやれやー！！！」

「は、はい！」

元神の迫力におされるようにして杖を空に投げた。

ヒュ「オオオオオオー————！」

修行の成果だらうか、今までのが比でない勢いで杖は空にすいいこまれていった。

「……」

「……」

「……」

「……おちてこなー」

「……」

「……だな」

杖が落ちてくるのをじつとまつていると近くから獣の吠える声と聞いたこともない叫び声がきこえてきた。

「なんだろう…？」

「いつてみる…」

声のした方に走つていくと、そこには傷だらけになつた一匹の竜と、その周りをとり囲んでいる数十匹の獣がいた。

「たすけなきや…」

普段だつたら自然の摺理とおもい手をだしたりはしなかつたが、竜を一目みたとたん見捨てることはできなくなつた。

なぜなら、

（滅茶苦茶かわいい！！！！）

その竜がまだこども、しかもウロコの色も翼のかたちもそんじよそらの竜にはとうてい及ばないほどきれいだつたからである。

「よし、そここの竜！今いくぞーーー！」

「…………さつきまでぐすぐすいつてたのはだれだよ…………」
しかし、そこで杖がないことにきがついた。

杖がなくても魔法は使えるがコントロールはむずかしくなる。
「えーい、かまうかーーー！」

サギタ？マギカ？セリエス？グラキアーリス（氷の17矢）！！
この呪文を唱えれば氷の矢17本があいてを射抜く！！

…………はずだつた。

しかし、杖がなくコントロールできなかつた魔法の矢は一本一本がそれぞれ大魔法クラスの攻撃力をもつてはなたれ、結果、近くの森もいつしょくたにしてこおりづけになつた。

「…………まあ、竜が助かつたからいいや。」

「…………」

杖が狙つたかのよつに足元につきあつた。

「…………氣にしたらまけだ。」

杖になにかつていてるんぢやないかとなやんでいふと、

「…………氣にしたらまけだ。」

クウーーーン

杖に関する「タガタ」でわすれさうれていた竜が弱々しく「えをあげている。

「ああ……竜を助けなきや……」

あわてて竜に近づき治療呪文をとなえる。

「プラクテ？ ビギ？ ナル

トウイ？ グラーティア？ ヨウイス？ グラーティア？ シット（汝が為に、ユピテル王の恩寵あれ）クーラ（治癒）！」
パア――――

光が竜のからだを包むと竜のケガはひとつ残らずなおつていた。

「よし！ なおつた！」

> なかなかみごとだな。 <

クウーーーン！

「……なんていってるかわからな……」

> それならわかるようにしてやろつ。 ホンヤク「ン ャク～！ <
もぐもぐもぐもぐ

クウーーーン「タスケテクレテアリガトウ」

「おっ、さすがホンヤ ロンニヤク見事だな。」

> ……もはや のいみないな…… <

ククウーーーン「オニイサン、ボクオニイサンノヤクニタチタイナ」
「やくにといわれても……」

> ちょうどいい。パートナーになつてもらえ。 <

「……そもそもそうだね。僕のパートナーになつてくれるかい？」

クウウーーーーン「モチロン『スス！』

こうして無事、パートナーを見つけることができたのでした。

オマケ：

「そういえば、きみの名前はなんていうんだい？」

クウウー「ナマエハナイン『デス』… オニイサンガツケテクダサイ」

「……そうだね。……！ ……きめた！！」

> なんだ？ <

「……」

「君の名前はオムレツだ！！」

クウーノンナンダカオイシソウナナマエ、キーラマシタ
いや、おかしいだろ～～～～～～～

パートナー（後書き）

この竜の名前は昨日の晩御飯からとりました。あれ、おいしーですね。

パクティオー！！（前書き）

……なんか他の人は評価点やお気に入り登録がめちゃくちゃいるのになんで私はこんななんでしょう？（へタだからです）皆さんにみすてられないようガンバりますので感想？評価おねがいしますね。

パクティオー！！

「よし、ではパクティオをおこなう元神がなにやら厳かな声をだしている。
(つていうか元神のクセにどれだけ偉そうなんだろう…。ウザイな…)

「なんだか扱いがヒドいきがするが…まあいい。オ、オムレツ顔をこちらに向けよ。」

オムレツがこちらを向く。

ちなみに今は元神の声はオムレツにもきこえるようになつていて。

「次に互いに血を魔法陣にたらせ。」

事前に元神にいわれ書いてあつた魔法陣に血をたらす。

パタパタ

ドバドバ！！

……なんだかオムレツの周りが凄いことになつていて。

「……ここに血の契約を結ぶ。パクティオー！！！」

パアーー

突然あたりが明るくなつたかとおもうとめのまえにパクティオカードがあらわれた。

なんだか説明書のようなものもついている。

「どれどれ」

「パクティオおめでとうー！」

私はパクティオを司る神です。

ぜんぜん仕事しない元最高神のかわりにあなたがはいつてくれてとてもうれしくおもいます。

あなたの従者オムレツにあたえられたアーティファクトは「カミガミノペツト」

能力は自分でたしかめてください。

このアーティファクトがあなたのたすけとなりますよう！」

：愛の神アフロディテより

追伸、私の加護があるから血を使う必要はありませんよ。手を握つてパクティオと言つただけでいいですからね。」

「……………」

「……………」

ボタボタボタ

「……………クーラ（治療）」

シュー／＼

キュイー／＼アリガトウ、オニイサン。デモコレデケイヤク、デキタネ」

「……………そうだな。いつたいどんなアーティファクトなんだ？」

「……………こればかりはやつてみないとな」

キュユイー／＼アデアツ（来れ）――」

シユワ／＼

オムレツの首が光つたかとおもひつとオムレツの首に首輪がついていた。

「……………これが「カミガミノペツト」なのか？」

「……………だらうな」

別段オムレツが強くなつたようなきはしない。

「……………オムレツなにかかわつたことはあるか？」

クウ／＼「トクニナントモ……」

「……………まあ、そんなにきにするな。今はお前がパートナーになつてくれたことで十分だよ」

キュウ／＼「オニイサン（ジーン）ボクガンバッテオニイサンノヤクニタツヨ。……………デモ、ボクガリュウジャナクテ、ユニコーントカダッタラ、コマワリガキイテ、モットオニイサンノヤクニタテタノ――」

「……………そうオムレツがいったとたん。

キュウウウ

首輪がひかり、オムレツが姿をかえた。

まず翼がひつこみ、角が真ん中でひとつになりねじれる。あしほうまのようなかたちにかわっていく。光がきえるとそこには一匹のゴニコーンがたつていた。

メヒ、メヒヒヒーン！～「ウワ、ゴニコーン＝ナシテル！～」
声までゴニコーンのそれだ。

「どうなつているんだ？」

そうつぶやくと

パサ

かみがひらひらとまいおりた

「なんだらう？」

「カミガミノペツト」の能力はありとあらゆる神獣、幻獣、動物に変身することができ、その動物の能力を使用することもできる超すぐれものです。お役だてください」

ためしにとオムレツが変身する。

メヒメヒヒ～「人間に変身！」

キュア

また、オムレツの体が変形をはじめる。

「ふー、人間になれたようですね。」

そこにはあらわれたのはマツパダカの少女だった。

パクティオー！！（後書き）

オムレツはじつはメスおちです。最初はオムレツ、オスでしたが、変身したときによとオスじゃまずいだろ？とおもいメスにしました。メスだからいいっていうものでもないですが、オスよりいいでしょう？

コベハジ（前書き）

今回は戦闘シーンがありますが文才がないため非常にチャチャイです。
ご容赦を。

オムレツがメスだとわかり、ひとりひとりあつたが多くはかたらない。

ただ、元神が鼻血を噴出する音だけは今でも耳にのこっている。

「ち、ちが、あれは鼻血ではなくてくそなことはどうでもいい。

「ひどい！」

今重要なのは僕にパートナーができること。

パートナーをえいればマスターにかかるかもしない。

パートナーができた今、僕がするべきことは魔法を覚えることだけ。こうして修行4日目が始まった。

ちなみにオムレツはネズミになつてそこいらの草むらにかくれてもらつていい。

やつてやるぞー！

気合いでこめてマスターのところに行く。

「ふむ、なにやら今日はやけにやる気まんまんだな」

さすがマスター、まさかきづくとはね。

「いえいえ、そんなことないですよ」

まだオムレツのことをばらすわけにはいかない。

「まあいい、でははじめるぞ」

気合いでいれてやつたせいか今日はいつもよつたぐさんの呪文をおぼえることができた。

くわしく書つと、「雷の暴風」クラスと「千の雷」クラスを全属性、さらには「闇の魔法（マギア？エレベア）」など、マスターの知つてこらあつとあらゆる魔法などだ。

「……もはや教える魔法はないな……」

魔法の修行が完成したのになんだかマスターはつれしくなさそうだ。

「オイ、ゴシュジン。シユギョウガオワツタナラハヤクコロソウゼ」

「……そうだな、今は私も同じ気持ちだ。私が長年、苦労に苦労をかさねて到達した領域にたつた4日でたどりつくとはな……」

「……さあ、次は虐や、じやなくて戦闘訓練だ。さあはじめのぞ」

「ケケケケケケ、ロロスロロスロロス……」

「はい。ではマスター」

「なんだ？」

「僕もパートナーをよんでもよいでしょうか？」

「パートナーだと……。ふん、だれだろうとすきにつかうがいい

「はい。オムレツ！－」

ガサガサッと音をたててオムレツが草むらからとびだしてきた。

「……そのネズミがお前のパートナーだと。……私を侮辱しあつて。ロロス！－！」

「うわ！」

いきなりチャチャチャゼロがきりかかつてきた。

カキン！

それをゴーローンに変身したオムレツが受け止める。

「なつ、ゴーローンだと！……なるほど、そのオムレツとやらが何者かはわからんがその変身能力がそやつのアーティファクトだな。チヤチヤゼロ！そいつはまかせたぞ！」

「リョウカイ」

流石に長年生きてただけのことはある。

驚いてもすきは全然できていない。

なら、真っ向から力比べでかつてやる。

「オムレツ！そつちはまかせたよ！」

チヤチヤゼロをオムレツに任せて僕は呪文をえいしょうする。

「プラクテ？ビギナル

オー？タルタローライ？ケイメン？バシレイオン？ネクローン？ホモノリートス？キオントウ？ハイドウ（おお地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ。」冥府の石柱「）－－」

巨大な石の柱がエヴァ 目掛けておちる。

「くつ、「断罪の剣」！」

冥府の石柱がまっ�たつにされた。

（さすがはマスター。でもつきはどうかな）

「プラクテ？ビギナル

ト？シヨンボライオン？ティアコネーター？モイ？バシレウ？ワー

ラニオーノーン

エピゲネーテーーー？アイタルース？ケラウネ？ホス？ティーナ

ス？フティレイン

ヘカトンタキス？カイ？キーリアキス？アストラプサトー キーリ

ブル？アストラペー

（契約に従い、我に従え、高殿の王。来たれ、巨神を滅ぼす燃えた
つらいえん。百重千重と重なりて、走れよ稻妻「千の雷」）！！コ
ンブレクシオー（掌握）！！

術式兵装「雷天大壯」！！

これは完全なるネギのパクリだけどまだネギは生まれていない、発
案者は僕になるだろ？

「雷速瞬動！！」

雷の速さでエヴァに突っ込む。

「チハヤブルイカスチ千盤破雷！！」

ガガガガガー

あたりがけしとぶがエヴァの姿はない。

「ふつ、その威力は流石だがまだまだつめが甘い小僧！！
どうやら影のゲートで転移してよけたようだ。

「くらうがいい。

ゼロ距離「闇の吹雪」！！

背中に手を当ててはなたれた「闇の吹雪」

「そんなもの「気合いの防御」！！」

大量の氣でエヴァの魔法をはじきとばす。

さらに、

「解放」「永遠の氷河」！

ためていおいた「永遠の氷河」がエヴァを氷づけにした。

十一
卷之三

オムレツの方をみるとチャチャゼロがボロボロになつてゐる。オムレツは大きな鳥、おそらくはシンドバッドの冒険に出でくる怪鳥になつてゐる。

いつたいなにが

い二いたいなはかあ二たのたぶ二か
でも、いまはそんなことより。

リベンジ（後書き）

かなり後になりますがネギ達ともからめます。
そこでこの小説の路線を決めてほしいです。

具体的にいうとネギの成長を助けながらともに生きるver
もしくはネギを完全否定し自分がハーレム状態ver
どちらがいいかということです。

ネギ肯定なら1

否定なら2

と感想欄にいれてください。

ついでに始動キー案や感想ものせて貰えるとうれしいです。

パクティオマスター

「ハーハツハツハ

負けたというのに工ヴァはなんだかうれしそうだ。

「わたしが何十年もの歳月をかけて到達した域にここまで早くたどりつかれるとはな。

ここまでくるといつそすがすがしいものだ。」

そういうてクククツと笑い続けている。

「オマエモナカナカヤルジヤネエカ、オムレツトカイツタカ」
チャチャゼロは人々に全力をだせたようですつきりした顔をしている。

「ありがとう。でもつかれた〜」

オムレツは今、人verだ。

「そうそう、ききたかつたんだが、このオムレツというやつは何者なんだ?

最初はネズミだつたし、途中では馬にもなつていた。
そして、今は人間だ。」

工ヴァがいぶかしげにきいてくる。

「じゃあ、オムレツ。変身といて。」

「はい。アベアツト（去れ）！」

しゅう〜

オムレツの変身が解け、元の竜の姿にもどつた。

「なつ……！竜だと！しかもこいつは古龍！」

古龍？それってたしか「真祖の吸血鬼」とおなじく最強種の竜だつたはず……。

どうりでチャチャゼロと互角に戦えたわけだ。

一人納得していると工ヴァはさらに聞いてきた。

「古龍に変身能力はない。ということはアーティファクトの力か。」

「うん。」

「トヴァの言葉に頷いてアーティファクトカードをみせる。

「なるほどな……。ん？」

「どうしたの？」

「いや、マスターの名前がアーティファクトカードにかかれていない。どうこうことだ？」

「さあ？」

「ふふ、それはだね。」

元神の解説文が始まる。

「君が神になつた時から君の名前はなくなつたんだ。

新しい神の名前は友達、この場合はトヴァにきめてもらう。」

「……えと、今僕名前がないんです。

マスターが決めてくれませんか？」

「なつ、名前がない？」

それに私にきめるとは……」

「ダメですか？」

「い、いやべつにかまわないぞ。」

「ジヨイソントカフレティッテノハドウダ？」

「絶対やだ！！」

なんて恐ろしい事をいうんだこの人形は。

「あ、あとパクティオもしてもらえ。アーティファクトはあつたほうがいいく

なるほどな。

「マスター！パクティオしてくださいーーー！」

「い、いきなりなにをいうんだ。……まあ、してやつてもいいがな……。

「ケケケ、ゴシュジン。パクティオハキスデヤツテヤレヨ」

ドカ、バギ、グシャ

「ス、スマナイ。モイウワネヒヨ」

ガク

チヤチヤゼロが崩れ落ちた。

「ふー。」

(^……)の人(?)にさからつてはいけない……(^)

神達のこころがひとつになつた瞬間だつた。

「よ、よし。」

先程の鬼の様子と一変して恥ずかしそうに咳く。

「……お前の名前はウェティスだ。」

この私が名付けてやつたんだ。ありがたく思え。」

ウェティスか…

「ありがとう。マスター。」

「ウェティス、いい名前だと思いますよ。」

オムレツも尻尾をふつていてる。

「それじゃあマスター。パクティオを。」

「ああ。それでは血を…」

「あつ、手を握つてパクティオー！って言つだけでいいよ。」

「……ずいぶんとお手軽だな。」

世の中そんなものである。

「はい、それじゃあ。」

「うむ。」

「パクティオー！…！」

ビカーー

光がきえるとパクティオカードがあらわれた。

どれどれ、どんなアーティファクトかな。

カードにはアーティファクト「パクティオマスター」とかかれてある。

「アーティファクト（来れ）！…！」

ピカ

カードが光るとそこには一冊の本が現れた。

「いつたいどんな力をもつたアーティファクトなんだ？」

「エヴァがきいてくるがこっちがしりたいくらいだ。」

とりあえず1ページめくつてみる。

するとそこには説明文が書いてあった。

「えーと、なになに」

「このアーティファクト、「パクティオマスター」は多数のアーティファクトを内包できるスーパーアーティファクトです。具体的に言つと一度契約した相手がこの本の1ページに描かれます。描かれた相手のかずだけアーティファクトが使えるようになります。

使いたいページを開いて再度、アーティファクトと唱えればそのページにしるされたアーティファクトがあらわれます。

そのアーティファクトは特別で相手のもつているアーティファクトとはことなります。

例：Aさんと契約しました。Aさんのアーティファクトはaです。しかしAさんと契約したあなたはbというアーティファクトを得ます。

つまり、これは契約した数だけ得をするアーティファクトというわけです。

じゃんじゃん契約してくださいね～

パクティオマスター（後書き）

主人公の名前は始動キー案からとらせていただきました。
ありがとうございます。

今回の説明文わかりづらいでしょうか？

今回も1か2か選んでください。

感想&10r2お願いします。

旅立ち（前書き）

今回も短いです。

沈黙があたりを覆う。

「……いつたいなんなのだ。このアーティファクトは？」

そんなのこっちがききたいくらいだ。

「ケケケ、ツカツテミリヤハツキリスルダロ」

たしかにそうだ。

1ページめくつてみると左にオムレツのえが、右にエヴァのえがかれていてその下になにやら文字がかかっている。

「ボクとエヴァは契約したからかかるてるわけか。じゃあ新しいアーティファクトが使えるんだね」

「そういうことになるな……。よしつかってみる」

「うん、わかった」

手始めにオムレツのほうでやってみよう。

「アデアツト！」

ピカ！

オムレツのページが光り腕環と紙が現れた。

えーとなになに、紙にはまたまた説明文がかかっていた。

「このアーティファクト、獣化の腕環くをみにつけるとありとあらゆる獣の力が付与されます。獣化することも可能です。」

えーと、どうやらオムレツのアーティファクトとていてるけど更に性能が高いみたいだな。

これなら変身しなくても獣の力を使うことができる。

「ほう、なかなか面白いな。契約すればするほどいいといつわけか」

「。次は私のをつかってみる。」

もちろんだ。いつたいどんなのがでてくるんだらうが。

ワクワクワクワク

「アデアツト！」

ピカー！

またもやページがひかり、今度はマントが現れた。

もちろん紙つき。

「わ、わたしにさきにみせんー。」

説明を読もうとしたらさきにエヴァにとられた。

もしもしょぼかつたらプライドがズタズタになるからだらつ。

「…………なにー！」

説明を読んでいたエヴァがいきなりさけんだ。

「いつたいどうしたの？」

「あ、ああ。今読むからきいてくれ。

「このアーティファクト、真祖のマント、は隠密行動や敵を封じ込めることができたりには盾としてもつかえます。

具体的にいうと重力、魔力、精靈力、気配、気、その他もろもろのすべてを遮断できます。

このマントを身につけていれば戦場で昼寝すらできます。」以上だ。

この凄まじさがわかるか？」

「…………なんとなく。」

「ふつ、まあいい。

だがさすが私と契約して得たアーティファクトなだけはあるな。

ハーハツハハー」

「ウレシソウダナゴシュジン」

エヴァのプライドはどうやらまもられたようだ。

「ところでお前これからどうするんだ？」

「えーっと、実は会いたい人達がいて。」

「……そうか。ずいぶんと短い付き合いだつたがお前達のことはきりいではなかつたぞ。また会おつ。」

「「うん」」

こうしてエヴァのもとを離れ、赤い髪のチート野郎達に会つたためにぼくらは旅立つた。

田嶺一（前職務）

送つて頂いた始動キー案をやつとこかせまわ。
ありがとうございました。

さてナギ達をさがそうか。

へどつする…………つてあれかくく

そのとおり

五ノ二

杖が空へとのぼつていいく。

「さーて、オムレツ。ナギ達に会う前に変身してくれないかい？」

「アレバロマ

あの頭が二つある犬だ。

「なんでケルヘ口入なんだ?」

「なんが悪徳的登場かしたくて」

マスターにあてられたのかもしれないがなんか悪役的登場をしてみたいんだ。

なんか声がきこえてくる。

「へつへ。久しぶりの焼き肉だぜ」

「うむ！ カギ！ あすは野菜がくるしれるんだ！」

「止まれん！」

1

うわー、いきなり「紅き翼」発見。

ナギに詠春、アルにラカンそれにゼクトもいる。

「「「「「 いただきまーす!!」」」」

ズカン!!

焼き肉に杖がささり吹き飛んだ。
どうしよつ……

「や、焼き肉がー」

「おのれー食い物を粗末にしあつて!!」

「…こんなことがまえにもあつたようなきが…」

「だれだ!!こんなバカなことをするやつは!!」

「…おぬしもやつたじやう」

「紅き翼」の面々がきれている。

(よし、じじだ!)

ケルベロス（オムレツ）にまたがり姿を表す。
「ハーハッハッハ!

紅き翼よそのていどの攻撃もふせげないとはなー!
うそです、わざとじやありません。

「おのれー!!」

詠春が刀を構え突つ込んでくる。

「神鳴流奥義！斬岩剣！」

おいおいころすきか、

「オムレツ!!」

「はい!!」

ガキーーン!

オムレツがユーローンになり斬撃をはじきかえす。

「なつ!!」

あいでが驚いているすきに呪文を詠唱する。

「ウエティス？ウエテック？ウ？エ？テック」

ちなみにこれが僕の始動キー

「ウエニアント？スピリトウス？テレスステレース？フローレンティ
ス？クム？フローレ？ソムニアーリ？スブ？カエロー？ベルクラッ
ト？ウーナ？テンペスター（来れ地の精 花の精！）！ 夢誘う花

纏いて蒼空の下 駆け抜けよ 一陣の嵐！－）

ウェーリス？ テンペスター？ フローレンス（春の嵐！－）

スタグネット（術式固定！－－）

コンフレクシオ－（掌握！－－）

スプレー－メントウム？ プロ（魔力充積）

アルマティオ－ネム（術式兵装）

「一場春夢」！－

これは「春の嵐」を闇の魔法でとりこんだ技、もともと春の嵐は大人数用催眠呪文。

それをとりこむことにより強力な幻術を常時発動することができる。それが「一場春夢」いちじょうしゅんむくだ。

……詠春にはこれだな。

えい！

「うわ！なんだ！ いきなり女がたくさん出てきた！」

はつはつはどうだ

「ふん、私も甘くみられたものだな。こんな手がなんども通用するわけ……」

ガク！

詠春が鼻血をだしてたおれた。

よし一人目。

「ハツハツハ、どうしたものかわりか？」

「ここですかさず悪者ボイス。

「へつ、みんな手出すなよ！」

「なにいつてやがるあいつはオレにやらせな」
案の定チート& a m p; バグの一人がのつてきた。

「オムレツ！ そつちの筋肉ダルマはまかせたぞ」
まずはナギたたかってみたいからね。

「ガワ－－（了解）！－」

竜の姿に戻りオムレツがこたえる。

「－－－－ごぞ！（ガワ－－）」

神と竜と二人の人間の影が交錯した。

出会い（後書き）

更新遅れてしません。

次回の更新は来週末、いりになるともいいます。

再来週からは3日に一回くらいで更新していきたいともいいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7555j/>

神様になれ!!

2010年10月8日22時43分発行